

non-in-différence

**Naoki Onogawa x Reiichi Namatame
Exhibition**

Artwork Description



Relief

小野川直樹と生田目礼一による作品「Relief」。小野川は樹と折り鶴を、生田目は球を制作した。約1.5cm四方の紙で小野川が折った鶴が一斉に樹から飛び立つ。本作で、小野川は自身の初の作品「鶴の樹」と同じ色の鶴をあしらった。初の作品と異なる点は、鶴に加え幹部分も白だということ。小野川が作家活動の本質に置く「折り」の解像度が高まった結果だろうか。2022年、娘の自死という喪失を体験した生田目は「生と死」をテーマに、太陽フレアを思わせるような形状を内包する球を制作した。その中で起こるカオスに反し丸さを保つ球には、どこか懸命さを感じられる。躍動感あふれる作品ながら、無垢な色合いによるものか、作品はどこまでも静謐だ。タイトルの「Relief」は「安心」や「休息」を意味する。「再生」を、作家活動における共通キーワードへ挙げる小野川と生田目。両者が本作へ込めたその物語を堪能したい。



icicle

フレーム型の台座と取り合わされた形状が小野川作品の中では珍しい本作。タイトルの「icicle」は「氷柱（つらら）」を意味する。木から垂れ下がる白いツタは正に「icicle」そのもの。樹木の生育に見ふさわしくなそうな環境下の中、小野川が創り出す樹はまっすぐ伸びている。その枝々からは無数の小さな鶴たちが飛び立つ。「これは不条理である」と感じる環境の中で考えることを諦めず真っすぐ生きる。その佇まいの美しさと本質の力を体現する作品。



curves

優美な曲線と作品下部の折り鶴の群れ。魅力的な構成の「curves」。デビュー以降「鶴の樹」を主に制作していた作家の作品としては、本作は大変珍しいものだった。本作は、その「鶴の樹」の基本構造「上に鶴、下に樹」を小野川が逆転させた作品群の一つだ。「curves」は「小さな鶴が折れる」作家から「立体作品を制作する」アーティストへ小野川の活動の領域を拡大するきっかけとなった貴重な作品である。寡黙な小野川の制作に対するストイックな姿勢と更新への熱情を感じさせる作品だ。



安らかな月

ざらりとした表面の質感が印象的なガラス球の作品。「安らかな月」は生田目礼一が娘の自死の後に制作した連作の一つだ。テーマは「生と死」。そこから生田目は「星」を見出し、「安らかな月」を制作した。光が当たる角度によって球の中に生じる影は、まるで死の先の静寂を私たちに示すようだ。無垢の球は死のメタファー。その表層に小さく無数に付与されたガラス粒は、悲しみそのものを表す。その一粒一粒が、いつか美しい思い出として輝くことを願う生田目の祈りも込められている。不条理な死を、安らかな祈りと結び合わせるような作品。



re:Flower シリーズ

ガラスの破片を花びらに見立てた「re:Flowerシリーズ」。その制作工程は骨を拾うようだと生田目は語る。「骨を拾う時と同じ乾いた音がガラスの破片を拾っている時にするのです。その時、細い骨を拾った時と同じ感覚に陥りました」細とは自死した生田目の娘の名だ。「割れたガラスを集め、再構築する。(略) 制作を通じ、彼女が何らかの形で「再起する」事を私は願っているのかもしれない」「re:Flowerシリーズ」の花々は、震災を経た生田目の故郷・宮城県東の玄昌石の上で、喪失と再起を繋ぐような力強い物語を纏う。

Artist



Naoki Onogawa

Biography

1991年 東京生まれ。1.5cm四方ほどの紙で折り上げた鶴を、自作の樹へ葉のようにあしらう「鶴の樹」シリーズを制作。自身初の作品「鶴の樹」を2013年「3331 千代田芸術祭2013 アンデパンダンスカラシップ展」で発表して以降、その作品は国内外で高い評価を得る。全国の百貨店やギャラリー、アートフェアへ意欲的に出展する。2019年、アメリカのSeattle Art Fairに参加。同年、小豆島に自身の美術館をオープンした。華々しい活躍を続ける小野川は、折り鶴を折り上げる行為を「祈りを込めた孤独な儀式」に感じるという。3.11をきっかけに作品制作を本格化した小野川。岩手県陸前高田への訪問は、作家にとって「生」と深く見つめあう体験となった。「生きること」「祈ること」人間の根源的な在り方を静かに問いかける「鶴の樹」の制作を通じて、小野川の「生」との対話は続く。

Artist Statement

共に時間を過ごして行くに連れて「折り鶴」には、彷徨っている気持ちの吐き場所であり、繰り返される惰性の様な違和感を感じることがあります。そこには自分と折り鶴とを繋ぐものや、自分の考える折り鶴の「居場所」や「終着点」というものは、ありませんでした。2011年に東北で震災がありました。翌年の4月に岩手県陸前高田へと赴き、現地の方の話を聞き、実際に町を見て回りました。自然の脅威の前では人間は何もできないのだと恐ろしく、また、その中で輝く生命の力強さも受けました。いつの時代も、人種も性別も社会的地位も関係なく襲ってくる自然と向き合い、時にあやかり、共存しているのだと改めて感じます。そしてその体験は、そのときを共にしたすべての生命と共有するものが生まれたと共に、いまを生きている、ということをはっきりと意識させられました。

その様な中で、折り鶴の持つ「祈り」という側面に親和性を感じました。折り鶴には、行き場のない気持ちを託し、この世ではない場所に行き来するようにと、祈りを込めた孤独な儀式の様な感覚を感じることがあります。うまく言葉では表現できませんが、今、折り上げている折り鶴は、そういった「祈り」からきているものなのかもしれません。自然の脅威や恩恵、またその様な事柄に折り鶴を重ね、作品に落とし込むことで、折り鶴の「居場所」を創り上げています。改めて見つめ直してみると、折り鶴はどこか尊く、また神秘的な「なにか」がひそんでいる様に感じます。そして、それはまた、私の信じている「美しさ」でありました。ひとりひとりが自分なりの「折り鶴」や「祈り」のかたちを持っているかと思えます。どの様に感じ、どの様に思いを重ねるかは人それぞれですが、作品との対話を通し、心を揺さぶる「なにか」が生まれるとことを願っています。

History

【Museum】

2019 「naoki onogawa museum」香川

【Exhibitions】

2013 「3331 千代田芸術祭2013 アンデパンダンスカラシップ展」3331 Arts Chiyoda

2016 「これまでとこれから」そごう西武渋谷店

2019 「Art Fair Tokyo」東京

「square」H.P.FRANCE WINDOW GALLERY MARUNOUCHI

2020 「爛漫」三越銀座店

2021 「folklore」瀬戸内市立美術館

「小野川直樹個展」松坂屋名古屋店

「祈り」銀座一穂堂

2022 「四季彩」天満屋岡山店

【Public Works】

2017 「CHRISTIE'S Magazine」Yusaku Maezawa: The record-breaking art collector

「The Art of J」JAL 海外向けキャンペーン webムービー「Privacy」

2018 「Journey to the World of HOKUSAI - The Art of J -」NewYork

naokionogawa.localinfo.jp

Reiichi Namatame

Biography

1980年 宮城県生まれ。ガラスオブジェクト制作を中心に活動。その形態は既存の概念に縛られることなく、自由だ。六本木アートナイトでは、六本木交差点と毛利庭園で作品を発表。音楽フェスや公園での野外展示も積極的に行う。2020年からは、巨大水槽の中にオブジェを設置するインスタレーションを開始。大胆な展示を行う生田目のルーツの一つに、キャリーナ・ゲヴァンとセドリック・ジナルによる、新島国際ガラスアートフェスティバルの講義が挙げられる。2人が高い技術力を駆使し制作するシュルレアスティックな装飾性を持つ作品は、生田目の作風の確立に大きな影響を与えた。アメリカのビルチャックガラス学校に在籍中に生田目がジェフ・ジマーから受けた精神的な教えも、作品コンセプトを構築する際の基礎の一部となった。海外ルーツの作家性を引継ぎ活動するミクストカルチャーな生田目の進化は続く。



Artist Description

生田目礼一は、自作のガラス製オブジェを用いた屋外インスタレーション作品を主に制作する。その理由の一つに、父・生田目富紀夫の存在がある。父は、息子の絵を認めない画家だった。父は玄昌石の板を支持体に、アクリル絵の具で美しい風景画を描く。反して生田目は、目に映る美しさだけの存在に、物事の本質を見出せなかった。洗練された完璧な花ではなく、泥がついた根のような、必死さや懸命さを持つ存在に興味を持ったのだ。結果、生田目はある種のグロテスクさを持つ絵を描くようになる。そしてそれは、父が肯定するものではなかった。自身の絵を否定され続けた生田目は、絵ではなく、かねてより興味を持っていたガラス造形の世界に入る。ガラスを素材に、生田目は「汚染された世界」で「蟲を寄せるために光り輝く植物」を多数作成。それらを用いたインスタレーション空間を生み出すため、自然の中に配置した。暗闇の中、極彩色の輝きと共に、どこか禍々しさを伴いながら浮かび上がるそれは、父が自身の作品で決して描かなかった「風景」だった。作家としてのアイデンティティを確立した生田目の制作領域は多岐に渡る。インスタレーション作品用のパーツに加え、パーツそのものを作品とするオブジェクトも制作する。その台座には、父が作品に用いる玄昌石を採用した。父のことを尊敬していると同時に越えたいと考える生田目が、より一歩、画家・生田目富紀夫の領域に踏み込んだ形だ。玄昌石の上に配されるのは、父と同じく生田目の血縁である、娘との出来事を通じて生まれたガラス作品。生田目の人生における極めて個人的な物語が、作品の背景にある。その物語が生田目本人を通じて未知の美を持つ作品に昇華される。生田目による、自己の物語の分解と、再構築を試みるプロセス。その蓄積がガラスに反映されることこそが、アーティスト・生田目礼一の本質と言えないだろうか。

History

【Public Collections】

2022 「新島ガラスアートミュージアム」東京

【Exhibitions】

2015 - 2017, 2019 「SONICART in SUMMER SONIC 2015」千葉

2016, 2017 「国営昭和記念公園 winter vista illumination」東京

2018 「六本木アートナイト 2018」東京

2019 「今川義元公誕生五百年祭 駿府城公園 紅葉山庭園」静岡

2020 - 2023 「アクアリウム宇宙旅行 UNDER WATER SPACE」横浜ワールドポーターズ

【Awards】

2013 「KONICA MINOLTA エコ&アートアワード」入選

「復興庁 eco japan cup & REVIVE JAPAN CUP in エコプロダクツ」入選

2014 「第27回新島国際ガラスアートフェスティバル Karina Guevin & Cedric Ginart」スカラシップ受賞

2018 「海洋堂アートブラ大賞 2018」入選

2022 MONSTER exhibition 2021 バリ展受賞

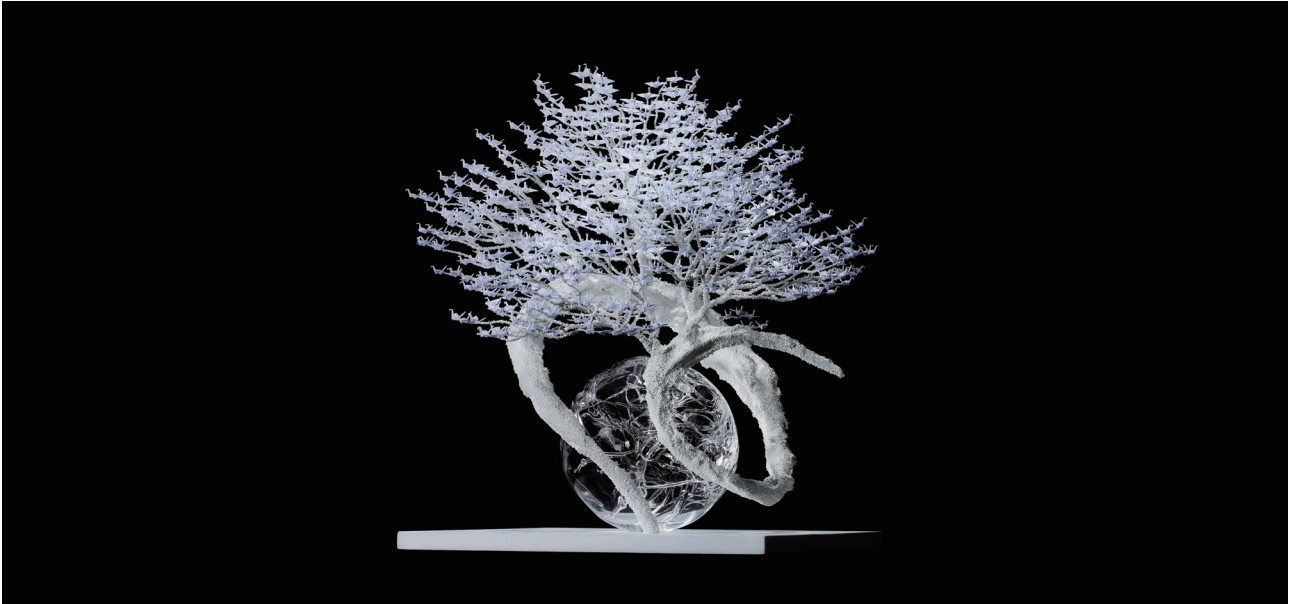
【Public Works】

2019 「ゴディバジャパン株式会社」冊子表紙

「株式会社シロ」新作香水テスターカバー

www.reiichinamatame.com

"non-in-différence" Description



Outline of the Exhibition

小野川直樹と生田目礼一。2人のアーティストの共通点に「喪失」と「再生」がある。二人とも東日本大震災を経験した後に本格的な作家活動を開始した背景を持つ。旧練成中学校の建物を活用する形で誕生した3331 Arts Chiyodaは、その2つの要素「喪失」と「再生」を内包する場と言えるかもしれない。廃校という「喪失」とアートセンターとしての「再生」を経験した3331はある種、双方の作家が眼差しを向けるこの二つの要素の本質を内包している。その3331は、2023年の3月末で旧練成中学校での運営を終了する。次の展開は2022年10月20日時点で未発表だ。小野川と生田目は、その3331で開催されるアートフェアで「再生」を軸に据えた「Relief」を発表する。「喪失」に向かう3331 Arts Chiyodaと「再生」に眼差しを向けるRelief。その接続を通じ生まれる新たな輪廻を楽しみたい。

About the Collaboration

欧米にルーツを持つアーティストがチームで活動することは珍しいと言える。だが、アジアでは主要な美術館や芸術祭のような大きな舞台でも集団アーティストが活躍する。2022年にChim↑Pomが森美術館で個展を開催。同年のドクメンタ15では、インドネシアのルアンバガアーティストック・ディレクターを務めた。どちらも複数名のアーティストで構成された集団だ。資本主義や民主主義が生み出す矛盾の解を異なる文化圏から得ようとすることも、また一般的な流れと言える「non-in-différence」では紙とガラスという異なる素材を用いて作品制作を行うアーティスト2名が共同制作したコラボレーション作品を初披露した。素材、キャリア、世代において共通点の少ない小野川と生田目。異質なものが繋がりが、そして交わること。その先に未知の美術は存在するのか注視したい。

Curator's Note

「non-in-différence」はユダヤ人哲学者、エマニュエル・レヴィナスの言葉。「私には関係がないということが出来ない」という文の「私には関係が無い」が「non-in-différence」にあたる。家族や友人たちをナチスによって虐殺されたことについてレヴィナスは「私には関係がないということが出来ない」と語る。この「関係」は「責任」の意と解釈することも可能だ。レヴィナスがナチスの行為に対して「私には責任が無いと言えない」と考えるのは私個人にとっては衝撃だった。数多の「無念」と「責任」を受け入れ、未来で誰も同じ想いをしないよう「祈る」。その思想は、出展作家の小野川直樹と生田目礼一それぞれが制作を通じて行っている取り組みそのものであると捉え、本展のタイトルに採用した。本展では「non-in-différence」を上句とし、下の句を空白にした。その続きは、本展を見たあなたに委ねる。

About WUTAMI

3331 ART FAIR 2022で初のキュレーション展を開催。NYを拠点に、日本のアーティストを欧米のアートマーケットに接続することやアートマーケットとアートの文脈への影響力を持つキュレーションの実現を目指す。

—

[ギャラリスト松岡詩美(まつおかうたみ)について]

アメリカNY生まれ。8歳の時に日本の鹿児島へ移転。2006年に東京芸術大学へ入学。大学在学中に留学したシンガポールの美術大学でアートマネジメントに出会う。2012年アートやハンドメイド作品を展示販売するPicaresque(ピカレスク)立ち上げ、その後会社設立。2022年アーティストの活動の場の拡大をサポートするため、より大きな美術市場を有する欧米マーケットへのジョインを目指しWUTAMIを立ち上げ。



[Special thanks] Senior Project Advisor: Keith Whittle / Art direction & Design: Masahiro Tozaki / Photography: Koki Urano / English text: Helena Svendsen / Manager: Mami Fujikawa Hiroyuki Kimura (3331 ART FAIR) / Sawako Yoshida (3331 ART FAIR) / Courier: Kazuhiro Sasa / Picaresque Art Gallery Staffs

WUTAMI

contact@wutami.co.jp / www.wutami.co.jp